

3 吉田能安先生が

創部第1回目の夏期合宿で行った巻藁射礼の思い出

昭和四十六年八月、長野県松原湖、玄武館弓道場で、桜美林大学弓道部創部第一回目の合宿が行われ、その最終日、第二玄武館弓道場で、吉田先生は巻藁射礼を我々部員に見せてくれました。

それは合宿最終日のことでありました。午前の稽古終了直前の『澄まし』の時に、吉田先生は、「午後の稽古は最初に、諸君に巻藁射礼を見せよう。」と言われ、巻藁の位置や、巻藁に的をどのようにセットするのか等、事細かに主将の私に指示を出されました。「いよいよ先生の射を拝見できる」と部員一同、昼食を早めに済ませ、第二玄武館弓道場に移動し、ワクワクしながらその時を待ったのであります。先生は普段の稽古衣と違い、鶯色の麻の和服を召され、威風堂々と道場にお出でましになられました。そして静寂の中で待ちに待った巻藁射礼が始まったのであります。その射の運行は、静の中にも鋭い動が、そして他を圧倒する気迫がみなぎった、見事な射でありました。「このような射を引きたい、こん



な射手になりたい。」と、言葉に出さずとも、誰もがそのように感じたはずであり、居並ぶ一同、一生の思い出となる感動の巻藁射礼であったのです。

吉田先生のこの巻藁射礼について思い起こせば、**桜美林大学弓道部が創部され、第一回目の夏期合宿で**、吉田先生は師範を引き受けた以上、弓道部の未来永劫の発展存続を祈念し、これが本物の弓道であるということを、我々学生に範示されたかったものと思われまます。そのような我が部に対する先生の熱い思い入れが、先生の行射（作法・射法）に乗り移り、鋭い気迫にあふれた射となり、我々に深い感動を与え、更には我々にやる気を引き出すという効果を生んだのであります。この写真を見るたびに、そのことが思い出されてなりません。

私は弓歴五十年を数え、日本を代表するような方々の美事な射を拝見し、勉強する機会に恵まれました。しかし**この時の吉田先生の射が一番だと**、今でもそのように確信致しております。次には吉田教場で先生の薫陶を受け、当時若手ナンバーワンの名射手**大宮様**が、確かその年の秋の正法戦で引かれた**射**に魅了され、感動致しました。

（大宮様は弁護士で、私の五歳上の兄弟子に当たり、今年から弓道を再開されたいと

初代師範 吉田能安 範士十段 巻藁射礼
（撮影：初代主将山崎）

のこと、吉田教場でいつの日にか再び一緒に稽古することを楽しみにしております。)

先日、私用で大宮様と、連絡を取り合う機会があり、この写真をお見せしたところ、「私が高校生の頃、つまりその写真より十年前の吉田先生は、すさまじい迫力で、兜を串刺しにしたということも、何ら疑いもなく当然と思われるような射でした。」と申されておりました。同門の先輩のその言葉に、「この写真より、すさまじい射とすれば、どれほどのものであったのか」と、改めて先生の偉大さを再認識した次第であります。

その後吉田先生の射の写真を収集しようと、私の年代の兄弟子や弟弟子の何人かに連絡を取ってみたところ、所持している方はほとんどなく、恐れ多くて撮影できなかったと言うことが実情のようであります。そんな中で、四つ下の土井教士（現在紫鳳会副会長）が所持しておられ、互いに複製し交換した次第であります。おそらくこの写真が、吉田先生が普通の和服を着用された（装束を着けず、骨法がわかりやすい）、生前最後の巻藁射礼の写真かもしれません。この写真をご覧になった土井教士もおそらくその通りでしょうとのことでありました。確かこの年（昭和46年）の秋に多発性関節ロイマチスという病に冒され、その後先生が弓をお引きになられたのは、立派な装束をまとい、道場開きや管矢などの特殊な場合だけに限られておったと記憶しております。



吉田能安 範士十段 巻藁射礼（乙矢）

（撮影：初代主将山崎）

もしこの写真が生前最後のものだとするならば、副将の井深君に感謝しなければなりません。「主将にこのカメラをお貸しします。」と言われ、昼休みに彼からそのカメラの操作を教わり、私が撮影したものだからです。彼は写真のセミプロで合宿にカメラを三台ほど持参しておりました。彼は吉田先生が引かれるのであれば「私の出番だ」とばかりに、射位の真ん前に三脚を広げ、自慢のカメラを据え撮影したのであります。私も正面から撮影したかったのでありますが、井深君がいるために、斜め前方の角度からしか撮影できなかったのです。しかし、そのことが功を奏し、偶然にも先生の迫力ある射を捉えられたのではないかと感じております。先生がよそで引かれた射ではなく、桜美林大学弓道部の活動そのものの中でお引きになった射なるが故に、我が部にとって貴重なものであります。後輩諸君にはそのことに思いを馳せ、その射（半切大に拡大し大学道場に寄贈）を参考に今後の稽古に精進されることを、大いに期待致しております。